

東京湾沿岸におけるウラギクの分布調査と保全・再生手法の模索

Distribution studies of *Aster tripolium* in the Tokyo Bay

for searching conservation and restoration measures

○倉本 宣・三島らすな・岡田久子 (明治大学・農学部)・Tim Gardiner (Essex Nature Club)

N. Kuramoto, R. Mishima, H. Okada (Meiji Univ.) Tim Gardiner (Essex Nature Club)

kura@meiji.ac.jp

私たちは多摩川中流域の礫河原保全の象徴種であるカワラノギク *Aster kantoensis* Kitamura の保全生物学的研究と保全の実践的な活動を研究者・市民・行政の協働で実施する多摩川カワラノギクプロジェクトを四半世紀にわたり行ってきた。一方、ウラギク *Aster tripolium* L. は塩性湿地保全の象徴種として扱われている (古屋のり子・上野隆史私信) ことから、東京湾の多摩川河口域においてウラギクの研究と保全活動を 2004 年に開始した。ウラギクの保全活動を行っている上野が多摩川における絶滅の危険と対策を東京都に訴えたところ、ウラギクは東京湾に位置する都立葛西臨海公園にも生育しているので多摩川からは絶滅しても構わないという回答で対策は講じられなかった (上野 2013)。葛西臨海公園のハビタットは、一時は東京オリンピックのカヌーコースが計画されたことから調査地に加えて見守ってきた。また、2015 年にロンドンの保全ボランティア活動に参加したところ人工島の塩性湿地にウラギクの大きな個体群が存在することが判明した。保全ボランティアにはウラギクは塩性湿地のキーストン種としてよく知られていた。

ウラギクについてこれまでに行ってきた研究内容は以下のとおりである。①東京湾およびテムズ川沿岸における分布、②個体群のマイクロな分布、③共存する種、④種子散布 (風散布および水散布)、⑤漂着物中の種子の種組成 (ただしウラギクは未検出)、⑥種子発芽 (緑陰感受性、変温効果、塩分濃度の影響、海水から淡水へ移したときの挙動)、⑦産物としての利用についての文献調査、⑧葉の塩分濃度についてのモデル実験、⑨種子の風散布についてのモデル調査、⑩東京湾とテムズ川の市民によるウラギク保全ネットワークの形成 (ただし、広報のみでまだ市民による参加はない)、⑪東京湾のコンクリート護岸の塩生植物定着による緑化の提言。

テムズ湾の護岸は **soft wall** と呼ばれるタイプで、下部と上部のみが固められているだけで中央部は土羽なのに対し、東京湾の護岸は下部から上部まですべてコンクリートによって固められていた。葛西臨海公園や荒川河口ではコンクリートの護岸の上に堆積した薄い土壌の上にウラギクが生育していた。そこで提言を具体化するための実験を準備中である。東京湾では葛西海浜公園をラムサール湿地とする動きが進行している。この機会に、生きものにとって棲みにくい東京湾の護岸をウラギクという象徴種を旗印にして生きもののための空間に変えていきたい。

キーワード：塩生植物、護岸、多摩川、堤防、海浜公園